



かしはら
第175号
 令和元年
 紀元2679年

- 「海道東征 浪速」
- 「令和」で世界に示す「日本」の存在感
- 万葉集の表記
- 新元号「令和」に寄せて
- 古典から御大典をみて
- 皇后陛下御歌碑
- 燈籠奉納の御案内



「海道東征 浪速」

五月一日第百二十六代天皇陛下が御即位あそばされました。平成から令和の時代を迎え、多くの国民が天皇皇后両陛下をお祝いする気持ちを表していたのは感動的でもありました。

橿原神宮では午前十一時より「踐祚改元奉告祭併せ始之月次祭」を斎行申し上げ、新帝御即位と新しい元号に変わったことを、御祭神神武天皇並びに皇后に御奉告申し上げた次第であります。

この慶事にあたり大阪市住吉区の学校法人浪速学院木村理事長の御厚意により浪速高等学校・浪速中学校の吹奏楽部員による「海道東征 浪速」を奉納演奏頂きました。

この曲は信時潔作曲、北原白秋作詞による交声曲(カンタータ)であり、昭和十五年紀元二千六百年に奉祝曲として作られた神武天皇御東征を描いた名曲であります。

御即位前の神武天皇が兄宮達と政をおこなっておられた日向高千穂に始まり、天業をおし弘めんと国の真中である東に向かう為の美々津からのお船出、御東征の途次を描き困難の末に橿原宮で即位され、我が国が建てられたという、壮大且つロマンに満ち溢れたものであります。戦後は、殆ど演奏されることもなかったのですが平成二十六年二月十一日建国記念の日に熊本県で戦後三回目となる演奏がありました。このマスコミ報道を聞き及び、何時の日か橿原神宮で、演奏の機会を得て御祭神にお聴き頂ければと漠然とした思いではあります。が持ち続けておりましたところ、以前より面識のありました木村理事長より大阪天満宮寺井名誉宮司を通じて「海道東征」奉納演奏のお話を頂きました。

時恰も新帝陛下御即位、令和の御代が始まった実に時機に叶った、大変有難いお話と承り、令和元年五月二十七日橿原神宮内拝殿におきまして「海道東征 浪速」の奉

納演奏が叶いましたことは、誠に嬉しく正に御祭神のお導きによるものと有難き極みに存じた次第であります。

木村理事長は「海道東征」を学院曲として相応しいと考えられ、信時潔氏の御遺族のお許しを戴き吹奏楽として編曲したうえで新たに曲名を「海道東征 浪速」とされたと承りました。

私自身今までに二度、交声曲としての「海道東征」を聴いておりますが、吹奏楽としては初めて聴くことになりましたのでどの様な演奏になるのかとても楽しみにしておりました。

畝傍山からの風が僅かに心地良く、辺りが新緑に包まれた中で、理事長以下役員・学校関係者・中高等学校各クラス代表生徒・保護者の見守る中、吹奏楽部員八十七名は山本吹奏楽部顧問のもと素晴らしい演奏を聴かせて下さいました。

今より二六八〇余年以上前、天照大神の「天壤無窮の神勅」のもと、この葦原の中つ国を人々の為に正しい政を行い、世界中の人々が恰も一つの家族の様に互いに慈しみ仲良く平和に暮らせる世の中を目指された神武天皇の建国の精神が高らかに奏でられたのであります。

「海道東征 浪速」を聴かせて戴き、改めて御祭神神武天皇の建国の大偉業を広く国民に訴えて行かねばならないと、思いを強くした次第であります。そしてこの大きな感動をもっと多くの皆様に味わって戴きたいものと明年の御鎮座百三十年の佳年に再び檀原神宮での奉納演奏を理事長にお願いしたことは申すまでもございません。

檀原神宮宮司 久保田昌孝

「令和」で世界に示す「日本」の存在感

産経新聞社論説顧問 齋藤 勉

大阪勤務だった昨年までの五年間、私の一日は自宅の目前に連なる生駒山の向こう側から昇る旭日に手を合わせることから始まった。その朝日の麓の「まほろば」には檀原神宮が、そのほぼ東方への延長線上には伊勢神宮が鎮座ましましてゐる。偶然とはいえ、何と幸いな場所に住まいを得たことか。宗教心には縁がないと思っていた自分でも驚くほど「祈り」の気持ち自然而然に湧いてきた。

「初春の令月にして、気淑く風和らぎ……」。万葉集から採られた「令和」の新元号を耳にした時、その清冽な響きからまず頭に浮かんできたのは、何度も参詣させていただいた初代・神武天皇を主祭神とする檀原神宮、そして皇室の魂の祖先である天照大神を祀る伊勢神宮の境内の凜として厳かな佇まいだった。神武天皇が苦難の東征の末、檀原の地に初代朝廷を開くまでを劇的に謳い上げたカンタータ（交声曲）「海道東征」を私ども産経新聞社が檀原神宮の絶大な協力を得て復活した思い入れもあつたからかも知れない。伊勢神宮では六年前の式年遷宮で内宮の「遷御の儀」に招かれたさい、天照大神のご神体が新しい正殿へと旧殿を出たまさにその瞬間、暗闇の中で静まり返っていた招待客の頭上の森で突然、ザワザワツと一陣の風が舞うという「神体験」をさせていただいた。

上皇さまご夫妻は天皇、皇后在位最後の地方訪問として神武天

皇陵と伊勢神宮に参拝された。五月一日に即位された新天皇、皇后両陛下も年内にもこの地と昭和天皇以前四代の天皇陵に赴く「親謁の儀」に臨まれるという。即位後、すでに三種の神器を受け継ぐ「剣璽等承継の儀」は行われたが、令和元年の向こう半年間、即位関連の一連の儀式が世界に発信される。三十年前の昭和天皇崩御に伴う平成への御代替わりの儀式は服喪の中で執り行われたが、今回は二百二年ぶりの譲位によるもので事情は違う。天皇陛下は「極力簡素に」と仰せられているが、それでも王朝絵巻さながらの華麗な儀式となることは疑いない。

注目されるのは、世界最古、万世一系の皇室の格調高く奥深い儀式に伴って、わが国の歴史を振り返っても前例のない日本を舞台とする最大規模の外交が展開されることだ。「日本」の存在感を世界にアピールする絶好機の到来である。

全国の神社を統括する神社本庁も御代替わりに伴う様々な儀式を英語で解説する冊子「MIYOGAWARI」を作成、各国の駐日大使館などに配布して対外発信にこれ務めている。その中で「皇位継承の諸儀式は、神代から現代まで受け継がれてきたわが国の精神の継承の儀式です」と強調している。

儀式のハイライトは十月二十二日に皇居・宮殿で行われる「即位礼正殿の儀」だ。「松の間」には陛下の玉座「高御座」、皇后さまの「御帳台」が設置され、中庭には色とりどりの幟旗が立ち並ぶ。国内外の参列者は二千五百人にのぼり、海外からは三十年前より約三十か国も多い百九十五か国の元首らが招待される。皇室と交流の深い王室関係者も多数参列する見通しだ。正殿の

儀を終えると両陛下は「祝賀御列の儀」に臨まれ、宮殿からお住まいのある赤坂御所までオープンカーに乗り、国民から広く祝福を受けられる。二十二日夜から三十一日までには四回、国内外の賓客を招いての祝宴「饗宴の儀」が催されるほか、二十三日には安倍晋三首相夫妻が都内のホテルに外国元首らを招いて晩さん会が行われる。ここでは狂言師・野村萬斎さん、歌舞伎役者・市川海老蔵さん、文楽人形遣い・吉田玉男さんが五穀豊穰を祈る演目を共演。さらに天皇陛下のご学友でもある能楽師の観世清和さん、三郎太親子演者による演目も披露される。日本が誇る伝統芸能の第一人者が打ち揃って新しい御代の船出をお祝いする稀有な舞台である。

一方で外交のクライマックスは六月二十八、二十九日に大阪で行われた「G20サミット（首脳会議）」である。これまで東京や沖縄、北海道、伊勢志摩で先進七―八か国だけの首脳会議があったが、今回は新興国を含む三十七もの国・地域や国際機関が参加した、日本で過去最大の国際会議である。安倍首相がホストとなり、トランプ米大統領はじめ、中国の習近平国家主席、ロシアのプーチン大統領、韓国の文在寅大統領、欧州の先進主要諸国トップらが「呉越同舟」で日本に初めて勢揃いした。

安倍首相と深い絆を結んでいるトランプ大統領はすでに五月二十五日から四日間、日本を公式訪問し、世界の国家元首として令和の御代で初めて天皇陛下と会見した。異例なことに、両国技館の大相撲夏場所千秋楽を安倍首相と一緒に観戦し、優勝力士の朝乃山に「米国大統領杯」を授与した。いわずもがな、

相撲は皇室にもつながる神事である。この前代未聞の光景は全世界に大々的に報道された。トランプ大統領は四月にも米国で安倍首相と会っており、三か月連続で日米首脳が会談するという前例のない濃密な関係と日米同盟の強化を世界に示した。

今年も自由、共産両陣営の分断の象徴だったベルリンの壁が崩壊、米ソ冷戦が終結してから三十年である。米ソに代わって現在、米国と中国が世界で覇を競う「米中新冷戦」が現実味を帯びてきた。その中国は日々、尖閣諸島奪取に食指を動かし、ロシア相手の日本固有の北方領土の返還交渉は難航を極め、韓国は日本人拉致、核・ミサイル開発を続ける北朝鮮にすり寄って「反日」姿勢を鮮明にしている。幕を開けたばかりの令和だが、日本を取り巻く国際情勢は日増しに険しさを増している。中国は十月一日、世界の指導者を集めて建国七十年を盛大に演出する計画という。こうした時期に米中対決のいわば最前線にある日本がリーダーシップを握ってG20サミットを開催した意義は限りなく大きい。日本の存在感が高まれば、中国に対する大いなる牽制となり、東アジアの今後の安定にも寄与するだろう。

日米の緊密ぶりを目の前で見せつけられた習近平主席は来春、に日本を公式訪問すると取り沙汰されている。そうなればトランプ大統領に伍して天皇陛下との会見を希望してくる可能性がある。その場合、習主席が天皇陛下の中国ご訪問を要請しても日本側は安易には応じてほしくないと筆者は強く思っている。芳しくない前例があるからだ。三十年前の平成元年六月、北京で民主化運動を弾圧した「天安門事件」で国際的孤立と経済制

裁に追い詰められた中国は三年後に天皇陛下の訪中を実現させ、日本は中国を国際社会に復帰させる契機をつくってしまった。これが中国急台頭の踏み台となった。現在の米中対立の渦中の天皇陛下の訪中には、中国側にとって覇権争いで有利となる「日米分断」の思惑が透けてみえる。

G20サミットの高揚感は一連の皇室儀式の華やかさと一体となって必ずや、次の外交の大舞台でもある十月の「即位礼正殿の儀」にそのまま持ち込まれるだろう。これを受けて十一月十四、十五日には即位した天皇が初めて執り行う「大嘗祭」の中核となる「大嘗宮の儀」が控える。陛下一世一代の重要儀式だ。

この幸先良い令和元年の国の勢いが来年、令和二年夏の東京五輪・パラリンピックにしっかりと引き継がれることを期待したい。

天皇陛下はわが国ばかりでなく世界の平和と安寧を祈る存在である。一連の儀式に込められた崇高な精神性と寛容の心、いわば「令和の祈り」の世界発信が各地で続く紛争、とりわけ宗教対立・弾圧を少しでも緩和してくれればと切に願う。

プロフィール 齋藤 勉(さいとう つとむ)

●昭和二十四年生まれ。四十七年、東京外語大ロシア科卒、産経新聞入社。モスクワ支局長、ワシントン支局長、東京編集局長、取締役副社長大阪代表などを歴任。平成三十年から論説顧問。「ソ連、共産党独裁を放棄へ」のスクープで日本新聞協会賞受賞。

●著書に『スターリン秘録』（産経新聞出版）など。

（産経新聞社「北方領土」で露大使に再反論 本紙・齋藤論説顧問「降伏後の占領は国家犯罪」より）

大島 信生

●「令和」の出典

平成三十一年四月一日、新元号「令和」が発表された。出典が国書になるのではないかとという予想もある中で、その出典は万葉集であった。万葉集からと聞くと、和歌から引用したのではないかと思われるかもしれないが、和歌ではなく「梅花の歌三十二首」の序文からであった。その原文は漢文であるが、読み下し文のかたちで引用しておく。

梅花の歌三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申べたり。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空には故雁帰る。

ここに、天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

もし翰苑にあらずは、何を以てか情を據べむ。請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異ならむ。園梅を賦し

て、聊かに短詠を成すべし。

天平二年正月十三日（太陽暦二月八日）、大宰帥大伴旅人の邸宅で梅花の宴が開かれた。「帥老」とは旅人を指す。「初春の令月」とは、初春のよき月、「令」はうるわしいの意で、ここでは正月をほめて言ったことになる。「氣淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」とは「氣は良く風は穏やかである。梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている」という意味になる。蘭については諸説あるが、ここでは香りのよい草を言うのであろう。その後この序文では「空には故雁帰る」まで春の情景が述べられる。さらに、「ここに、天を蓋にし」から、宴の場を叙し、「園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし」で終わる。この宴は、当時行われていた漢詩を作る詩宴ではなくて、短詠、即ち短歌を作ることを目的としたものであった。

なお、この序文をめぐっては、『文選』の張衡「帰田賦」や王羲之「蘭亭序」など、漢籍の影響があることが江戸時代の契沖以来指摘されている。漢字文化圏の日本において、漢籍の影響があるのは当然で、漢籍を受容しつつ、文章を織りなすのが当時の文章のあり方なのであった。

●万葉集の表記

万葉集は、万葉仮名で書かれているとよく説明されている。実はそれは正確な言い方ではない。梅花の宴の歌を例にとつて示す（ルビ付きの原文と〈読み下し文〉で示す）。

和何則能尔 宇米能波奈知流 比佐可多能
阿米欲里由吉能 那何列久流加母 主人 (5・八二二)

〈我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも〉

右の「主人」とは大伴旅人を指す。この歌の原文表記は万葉仮名のうち音仮名で表記されているのである。しかし、「梅花の歌三十二首」の中に、

万世尔 得之波岐布得母 烏梅能波奈 多由流己等奈久

佐吉和多留倍子 筑前介佐氏子首 (5・八三〇)

〈万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし〉

とあり、音仮名表記の中に「万世」という正訓字（和語の意味通りの漢字を使うもの）と言われるものも混在していることに注意すべきである。

なお、万葉仮名の中でも音仮名に対して訓仮名と言われるものもある。

麻衣 著者夏樫 木国之 妹背之山二

麻蒔吾妹 (7・一一九五、藤原卿)

〈麻衣着ればなつかし紀伊の国の妹背の山に麻蒔く我妹〉

の「夏樫」は、形容詞なつかし（心ひかれて離れがたい）を表したもので、漢字の訓を利用しており訓仮名と呼ばれるものである。

万葉集の表記は、万葉仮名の音仮名を主とした音仮名主体表記と言われる巻五・十四・十五・十七・二十と、正訓字を主とした訓字主体表記と言われる巻一・四、六・十三、十六に大別されるが、それぞれに工夫しながら表記がなされている。したがって、万葉集は万葉仮名だけで表記されているわけではないのである。

万葉集は、日本現存最古の歌集と言われるが、万葉集の原本は存在しない。しかも、平安時代には読めなくなっていた。天曆五年（九五二）村上天皇の勅により、いわゆる梨壺の五人に、万葉集の付訓を命じている。古訓といわれるもので、その後、万葉集は写され訓まれ、現在に至るのである。

●難訓歌と研究のあり方

万葉集にはいまだに定訓を得ない歌もある。

莫囂円隣之大相七兄爪謁氣 吾瀨子之 射立為兼

五可新何本 (1・九、額田王)

右の歌は、齊明天皇の紀伊行幸時の額田王の歌である。初・二句は諸説はあるものの、定訓をみないのが現状である。これは、いわゆる難訓歌と言われるもので、極端な例であるが、まだ万葉集には本文や訓、解釈に疑問のある歌がいくつも残されている。

一般に目にする万葉集の歌は、読み下し文の形で示されるのが通常であるが、漢字ばかりの原文も合わせて読んでみると、筆

録者の意図も感じられて興味深い。右の九番歌は、我々に謎掛けをしていてもある。

かつて、皇學館大学再興時に教授を務められた澤瀉久孝博士は、『萬葉古徑』（昭和十六年六月、弘文堂書房）の「はしがき」において、次のように述べておられる。

萬葉研究の窮極所は、ただ一首一首の作品を正しく會する事に盡きると信ずるわたくしは、この書に於いて、その窮極所への小徑をほんの少しばかり懇いてみたつもりである。

このように、萬葉集研究は一首ずつ正しく理解することが肝要であると説いている。そのためには正しい本文と訓を定めて、一首ずつ正しい解釈を加えていくことが重要なのである。

●おわりに

萬葉集は、東北から九州まで多くの土地が詠まれている。現地に足を運んで、その風土に触れてみることも萬葉集を理解するには大切な事である。大和は萬葉故地の中でもその中心であるが、「かしはら」も、柿本人麻呂や大伴家持によって詠み込まれている（（ ）内は原文表記）。

玉だすき畝傍の山の 櫃原（櫃原）の聖の御代ゆ（或は云ふ、「宮ゆ」）生れましし神のことごと…（1・二九、柿本人麻呂）：あきづ島大和の国の 櫃原（加之波良）の畝傍の宮に 宮柱 太知り立てて 天の下知らしめしける 天皇の天の日継と 継ぎてく来る君の御代御代…（20・

四四六五、大伴家持

このように、櫃原の地を詠み込み、第一代神武天皇以来の皇統が讃えられているのである。皇統讃美の歌は、柿本人麻呂、山部赤人、田辺福麻呂らの宮廷歌人や大伴旅人・大伴家持らによっても歌い込まれている。これらの歌についても機会があれば述べてみたいが、第百二十六代の今上陛下の御即位を言祝ぎ、「令和」の御代の弥栄を祈念して稿を閉じたい。

* 萬葉集の引用（原文・読み下し文・現代語訳）は、新編日本古典文学全集〈小学館〉による。

プロフィール 大島 信生(おおしま のぶお)

● 昭和三十二年十二月九日 福岡県に生まれる。

皇學館大学大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻満期退学。博士（文学）。皇學館大学助手・講師・助教授・准教授を経て現在同教授。皇學館大学研究開発推進センター長・同佐川記念神道博物館長。万葉学会編輯委員・美夫君志会常任理事・古事記学会理事・上代文学会理事。専門は萬葉集を中心とする上代国語国文学。

● 著書に『萬葉集の表記と訓詁』（おうふう）他。

総務部教化渉外課 権禰宜 伊藤 英佑

令和元年五月一日、皇位継承に伴い、新帝陛下は「剣璽等承継の儀」「即位後朝見の儀」に臨まれました。

一方、橿原神宮では、踐祚改元奉告祭が斎行され、御祭神に新しい御代のはじまりを奉告し、国の安泰と国民の安寧をお祈り申し上げました。

また、御社頭においては、思わしくない空模様ではありましたが、早朝より参拝に来られる方、御朱印を受けられる方が多くお越しになり、賑々しい令和の幕開けとなりました。

扱、新帝陛下の御大典と呼ばれる一連の皇位継承に伴う儀式は、どの時代からはじまったのでしょうか。古典を紐解くと我が国はじめての即位式である第一代神武天皇即位に遡ることが出来ます。

神武天皇即位二年前の己未三月七日、神武天皇は

「上は天神の国をお授けくださった御徳に答え、下は皇孫の正義を育てられた心を弘めよう。その後国中を一つにして都を開き、天の下を掩いて一つの家とすることは、また良いことではないか。見れば可の畝傍山の東南の橿原の地は、思うに国の真中である。ここに都を造るべきである。」

と奠都の詔を下されました。それは、神武創業の精神であり、全ての国民が家族のように手を取り合い助け合う事が国の発展に繋がると云うことです。

また大祓詞に「大倭日高見國を安國と定め奉りて 下つ磐根に宮柱太敷き立て 高天原に千木高知りて 皇御孫命の瑞の御殿仕え奉りて……安國と平けく知ろし食さむ」とあるように、平和な国（＝安國）を築くために、都造りに着手されました。そして、翌年庚申九月二十四日には媛蹈鞬五十鈴媛を召して正妃とされたのです。

神武天皇は辛酉の年春正月、橿原宮にて第一代の天皇として御即位あそばされます。御即位に当たり、仕えた臣下の中には神代以来より仕えている神々の子孫がおり、天太玉命の孫である天富命は配下の齋部を率いて神宝・鏡・矛・盾・木・綿・麻などを造りました。櫛明玉命の子孫は祈祷の意味を持つ御祈玉を造り、また天日鷲命の子孫は木綿と布を造ったとされています。この時「剣璽等承継の儀」が行われ、天兒屋命の子孫である天種子命は天神の寿詞を奏上します。寿詞は吉事、めでたいことで、天神から伝わってきた祝詞のことをいいます。初めての即位式の時、中臣氏の祖先である天種子命が奏上したので、後世は専ら中臣氏が奏上するようになり、中臣の寿詞ともいわれるようになります。また、天富命は齋部を引き連れて、天璽である八咫鏡、天叢雲剣を捧げ持ち、玉座に奉安しました。道臣命は来目部を率いて宮門の開閉を掌り、四方の国に朝廷が尊い事を示させました。また、天照大神・高皇産靈神の御命令に従って皇居内に神籬をたて、国土の神々と宮殿の敷地の神々をお祀りされ、大殿祭、御門祭も斎行されます。大殿祭とは、天

皇の居住する宮殿関係の神を奉り、宮殿の平安を祈る祭祀です。都が藤原京や平城京、平安京等に固定される以前は、天皇の御代ごとに皇居が移されていきました。『延喜式』に収められている大殿祭の祝詞には、天皇の即位に際し、新しく造られる宮殿が平安であるように言祝ぐ内容が記されています。御門祭は大殿祭に附随する祭で、皇居の門に入ってくる邪悪な行為をする神を祓い、皇居内の平安を祈る祭りです。また、先代旧事本紀によると『皇子等と大夫達は郡官・臣・連・伴造・国造らを率いて、年賀の拝礼を行い、現在まで続く、即位・賀正・建都・踐祚などの儀式はみなこの時に起こった』とあります。このことから、神武天皇の御大典は、即位式に留まらず、賀正と都定めの中の三つの意味合いを持つていたということになります。そして、神武天皇は皇位の尊さを示しながら、国を一つの家族のように統治されました。正に「国家」の始まりといえます。

このように、現在行われている御大典は橿原神宮の御祭神である神武天皇が橿原宮に即位されてより続いていることがわかります。新帝陛下は即位礼及び大嘗祭の後、神武天皇山陵及び昭和天皇以前四代の天皇山陵に拝礼なされ、御即位を御奉告になられます。

振り返ってみますと、平成二十八年四月三日、天皇皇后両陛下（現 上皇皇后陛下）におかれましては、畝傍山東北陵で斎行された神武天皇二千六百年式年祭 山陵の儀に臨まれ、その後橿原神宮に御参拝になられました。皇后陛下はその時の

様子を

遠つ世の 風ひそかにも 聴くごとく

檜の葉そよぐ 参道を行く

とお詠みになっておられます。この御歌は平成二十九年の年頭に宮内庁より発表され、ふと遠い歴史の彼方から吹いてくるひそやかな風の音を聞くようなお気持ちで、檜の葉のそよぎを聞かれつつ参道をお進みになられたことをお詠みになったものです。

建国の地に建つ神宮として、私達の御祖先が神武天皇の御大典の折りに聞いたであろう遠つ世の風の音を感じながら、全国の崇敬者の皆様と一緒にこの度の御大典を奉祝し、令和の御代も平和な国（＝安國）でありますよう祈り続けて参ります。

参考文献 橿原神宮第七代、第十二代宮司 菟田茂丸著（昭和十五）『橿

原の遠祖』平凡社

宇治谷孟訳注（昭和六十三）『日本書紀（上）全現代語訳』講

談社学術文庫

齋部広成撰・西宮一民校注（昭和六十）『古語拾遺』岩波文庫

本社本庁監修（平成二十七）『神話のおへそ「古語拾遺」編』

扶桑社



御歌碑は元神宮大宮司で、現在神社本庁統理である鷹司尚武氏に御揮毫を頂きました。

皇后陛下御歌碑

檀原神宮では、本年四月三日の神武天皇祭終了後に、外拝殿・大絵馬前にて一つの御歌碑（石碑）がお披露目されました。この御歌碑には平成二十八年四月三日の神武天皇二千六百年大祭にあたり、現在の上皇上皇后両陛下が檀原神宮へ御参拝になられた際のお気持ちを上皇陛下下がお詠みになられた歌が刻まれています。

御歌は平成二十九年年頭に宮内庁より発表され、ふと遠い歴史の彼方から吹いてくるひそやかな風の音を聞くようなお気持ちで、檜の葉のそよぎを聞かれつつ参道をお進みになった情景をお詠みになられたと言われています。畝傍山の稜線を彷彿とさせる御歌碑は、静かに参拝者の皆様を迎えています。

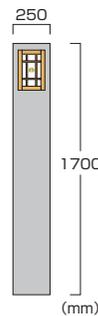
燈籠奉納の御案内

檀原神宮の豊かな社の境内参道並びに荘厳なる社殿には、これまで全国の御崇敬の皆様より九百基余りの燈籠を御奉納頂いております。燈籠には御奉納者の芳名を刻み、末永く御篤志を伝えて参ります。

【各種燈籠】

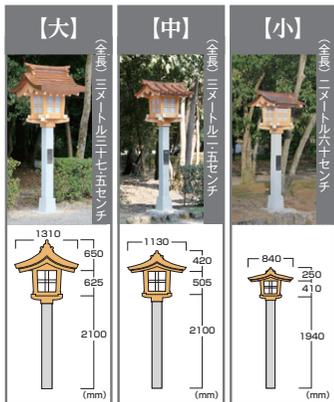
■本殿外周燈籠（御志納料：五百万円以上）

御祭神がお鎮まりになる本殿近くに想いを込めた一燈を。



■北参道燈籠（御志納料：百五十万円以上より）

檀原神宮旧正門にあたる北参道から続く参道を照らします。



釣燈籠（御志納料壹百万円以上）を御希望の方は直接お問い合わせ下さい。

【お問い合わせ】 檀原神宮庁 奉賛部

電話：（〇七四四）二二三三七二（受付時間 午前九時～午後四時）